

感情と意味世界



## まえがき

未来社会を描いたSFで、必要な物資その他がいつでも供給され、突発的災害も起きないように管理されている等の快適な環境で、しかし感情の乏しくなった人間たちが蠢うごめいている、そういう像を示されると、私たちはどう反応するか。「人間味の無い」「もはや人間ではなくなった生き物」の世界と受け止め、こういうのは真つ平だ、と思うのではないか。それは、感情が人を苦しめ、人を傷つける、或る種の感情を懐いたことを恥はづかしく思う、あるいは自分の感情をもてあます等のことであっても、さまざまな感情を味わう生であるからこそ「人間らしく」生きている、と考えるからではないのか。私がいま書いたばかりの文章にみえる「苦しめられる」「苦しむ」「傷つく」「恥はづかかしい」という言葉が既に感情の幾つかを指すのであり、「そういうことがあつても」という言い回しの含意は、できればそういうことはしないで欲しい、というのだろう。それでも、そのような感情も一つもつことがないとするなら、それは生きていることを平板なもの、どうでもいいものにしてしまふ。大きな喜びと苦悩、ささやかな嬉しき、細こま々した心配、不安、高まる希望、そういうものが彩る生活であればこそ、人は自分の生を生きていると思うのではないか。

だから私は、人が生きるとはどういうことか、その有りようを言葉で明確に描くということ、さまざまな局面に焦点をおきつつ為してきながら、ずっと、感情についても書かなければ、書きたいと思つてきた。

感情を主題にして書かれた本は夥おびただしい。自分の感情と、あるいは人の感情とどう付き合うかの指針を示そうとする、悩み解決型。感情をどうコントロールすれば、スポーツで、仕事で成功するか等のマニュアル本風の。エッセー風に、あれこれの有名・無名の人物たちの折に触れてのさまざまな感情の生起、あるいは感情の隠蔽のエピソードの数々を紹介して、人々の共感を呼ぶ本。

学術的なものもある。自分の執筆のために当然に私は学術的な本にかなり当たって来た。論じることが不可欠なものとして感情を扱う幸福論、道徳における感情の役割を論じるもの。人間が感情をもつ動物へと進化してきたその経緯の解説。感情の脳科学。集団的感情のメカニズムの分析とその力の働き方を論ずる社会学や政治学の書物。どういう感情種が、いつごろ、どういう社会で生まれたかを示そうとする歴史的観点からの著作。文化の違いと感情のちがひ、表し方、隠し方の違いを教えてください。諸感情と表情や体の有りよう全般との関係を論じる本も、立場を異にして、さまざまにある。さまざまな感情がどのように生まれ、どのような役割をもち、さまざまな感情の位置関係はどのようなものを示そうとする、さまざまな立場の感情の心理学。あれこれの感情を巡る数々の実験を紹介する、やはり心理学に属する本。他の人の感情が分かるか、分かるとすればどのようなにして、どの程度にか、あるいは分かったと思えるのはどういう場合か、ロボットは感情をもち得るか等を論じる本。感情の病理を扱う研究書。

それらからさまざまなことを教えられた。が、そのうちに(特に心理学の本には)うんざりするようになった。さまざまな感情を分類したり、或る幾つかの種の感情について微に入り細をうがったりの記述をどれほど読んでも、著者(あるいは書物で紹介されている研究者たち)が人間の経験において感情というものはどういう位置を占めると考えているのか、読み取れないのである。確かに、体と感情との関係、認知と感情との位置関係、文化と感情との関係等についての論など沢山ある。けれども、肝腎の見取り図を明瞭に提示していると思えるものには出会わなかった。

実のところ、感情について、読者の興味を持続させつつ、人間の経験における感情の位置を明瞭に描くには、どういう順番で書けばよいのか、これと思う仕方を見つからないでいた。ところが、或る特殊な主題との関連で感情についても考察した論稿を書き(本書第1章)、更にその姉妹編となる論稿(第2章)を書いたら、どうすればよいか分かった気がした。そこで書いたものが、本書で最も長く、全体の三七パーセントほどを占める第6章である。そして、これら三篇の内容を補うものとしてちょうど役立つと考える既発表の三つの論稿を第3、4、5章として間に配して一書にすることで、私が描きたい内容をより滑らかに読者に伝えることができるのではないかと考えた。(なお、実は第1章、第2章は、私が勤務する大学での私の事

情で、本書第6章を書き上げた前後に、学内機関誌に印刷・掲載の運びとなっている。

第1章と第2章では、表題からすると「精神」の概念が主題となっていて、本書の主題「感情と意味世界」とはどう関係するのか、と訝しく思われる向きもあるだろう。また、これらの章は精神医学という、私たちの日常生活からは些か遠い話題から入っていて、その点でも読者を戸惑わせるかも知れない。しかし、第一点に関して言えば、本文で理由とともに述べるが、私は「精神」という概念は積極的には使わないのであり、その上で敢えて「精神」とは何なのかと問えば、いわゆる精神の本体は想像する力にあり、しかるに、想像は意味世界を開くのだ、と考えている。だから、これら二つの章も、基本的には、人は意味世界に生きるのだ、ということに関する考察なのである。

次に、第1章、第2章が精神医学の話題を取っかかりとしているという、第二点について。第1章では、精神医学が扱う精神の病理は、人の意味世界との関わり方の或る特殊さとして捉えることができるのではないかということを論じている。そして第2章は特に、精神の病理を「心理的問題を抱えるゆえの自由の病理」と捉え、その病理では「自己の確立」が危ぶまれるとする考え方を取り上げることに、一方では「心理＝感情」に踏み込み、病理を離れて一般的な事柄として、感情というものが如何に意味世界に関わっているものかを示そうとし、他方で意味世界における自己の象りに感情が関わる様をみようとしている。こういうわけで、二つの章は、『感情と意味世界』という本書全体の主題への、特殊だけれども適切な入り口となっていると考える。繰り返すが、第1章を成す論稿を書いたことが、本書の構想を開いてくれた。少し特殊な切り口のものであるが、おつきあい願えれば、と希望する。

さて、自己の象りについて考察した第2章を受けて、第3章として、人が一意味事象として自己像をつくってゆく有りようを描いた論稿を配した。人は「移りゆくものでしかない現在」に生きながら、時の推移を越えて或る程度は持続する意味世界を（そこでの諸々の変化を含めて）生き、その世界の中に自分自身の像を位置取らせるのである。そして第4章に宛てたのは、意味世界は常に価値世界であるということを、言葉に即して論じた論稿であり、第5章は言葉と感情との関わりを考察した論稿である。

それから、あと一つ。本書で取り上げている感情の種類が余りに少ないことに、どうということ？　と思われる方々がいらつしやるに違いない。そもそも本書では、さまざまな感情について、それらのそれぞれが「どういうときに生じ、どういう特徴をもつか、また、他の種類の感情とどういう関係にあるか」などの考察<sup>1</sup>はしていない。本書の眼目は、感情が、人の経験においてどのような位置にあるのかを明らかにすることにある。その位置は、本書の表題「感情と意味世界」が告げているように、感情が意味世界と関わっていることに着目することによって明らかになる。というのも、人は動物の一種であるから、或る構造とそれに見合ったさまざまな機能をもつ体として物的環境の中で物的諸事象と交渉しつつ生きるのだが、それだけでなく意味世界をも生きるものであり、すると、感情の意味世界との関わりが示せるなら、意味世界の成立に関わる人間に特有の事柄と感情との関係も理解でき、人間の経験における感情の位置も明らかになることが期待できるわけだからである。

体の感覚と物象(物的世界を構成するさまざまなもの)の知覚という経験のエレメントがあり、その人間の知覚には想像の契機が潜み、その想像が羽搏く<sup>はばたく</sup>ことで意味世界が開かれる。しかるに、諸々の意味事象はそれぞれ(正負いずれであれ)価値を纏<sup>まと</sup>っていて、体として生き延びつつ人は、それらの価値群とさまざまな仕方に関わりながら、時の推移を貫いて生きるものとして自己を主張する。その自己像も、各自が紡ぐ意味世界の中で位置取りしつつ象られるのである。だが、その都度<sup>つど</sup>の自己を満たすものは何か。感情である。感情というものは、意味が含む価値を人が感受する際に人の側で生じる反響である。そして感情はまさに人の宝物として現われる。繰り返すが、哀しみや苦悩さえ、憂鬱や挫折感、淋しさですら、それらが感情であるゆえに受け入れるべきであり(というより感情は人のその都度の有りようの中心を成すのであり)、それらをも含めた感情こそが人の生きることに内容を与え、結局は生きることの歓び、生きることの肯定へと人を誘う。この「歓び」というのがまさに感情の一種であり、「肯定」という判断も価値判断であり、それゆえ既に或る感情的響きをもっていることに注意したい。(だから、感情を、どういう役に立つか、という機能の観点から論じる研究書は多いが、確かに機能はあるにしても、機能抜きで、感情を感情そのこととして受け止める態度も必要である。)

なお、章の配列は、もちろん内容上の関連を考慮して決めているのだが、読者におかれては、詳細目次をご覧になって、自分に最も興味深いと思われる章から読んでいただいでかまわない。

それから、本書での括弧書きの多用について一言。すっきりした論旨を追いたい読者の方々は、括弧を読み飛ばしていただきたい。（そのようにしても話がつながるように書いているのはもちろんである。あるいは、括弧を飛ばすことで論がスツと流れる、そのことを目指して、長くなる文の一部を括弧に入れている場合もある。）そうして、できれば、その後、括弧書きの中も読んでいただきたい。

それだったら括弧書きは註に回せばよいではないか、という意見も出るだろうことは承知している。しかし、註だと、読者が本文の該当箇所との対応を見つけなければならぬなど面倒が出てくる。やはり括弧書きを記したその箇所では是非とも記したかったことを私は書いている。けっこう重要な内容のものも多い。ただ、文章の流れとしては、括弧の中に入れるべきだと判断したものである。ご理解いただければ幸いである。



# 大目次

## 感情と意味世界

まえがき	.....	i
第1章 「精神」という概念について (1)	.....	3
第2章 「精神」という概念について (2)	.....	33
第3章 自己像	.....	57
第4章 言葉と価値	.....	71
第5章 感情と言葉	.....	103
第6章 感情と意味世界	.....	135
あとがき	.....	263

まえがき	.....	i
第1章 「精神」という概念について (1) —— 「精神医学と価値の問題」を契機として	.....	3
第1節 本章の主題と筆者の立ち位置	.....	3
(1) 本章の主題	3	
(2) 筆者の立ち位置	4	
第2節 体の不調と医学	.....	6
(1) 体の不調と手当て・病気の概念	6	
(2) 体の病気と健康 —— 本人の体験と生理学的根拠に基づく判断	7	
(3) 「不調」「病気」「障害」「異常」の諸概念	9	
第3節 精神の病という判断と価値の問題	.....	11
(1) 「精神科」という診療科名	11	
(2) 病の認識と負の価値の体験とは同じか・両者の分離の可能性	12	
(3) 「精神の病」を誰が認めるのか	13	
(4) 精神科医と患者 (1)	15	
(5) 精神科医と患者 (2)	17	
(6) 治療は何を指すのか	19	
第4節 いわゆる「精神世界」をどう考えるか	.....	20
(1) 物的世界・社会的環境・意味世界	20	

第2章 「精神」という概念について (2) —— 「精神が自由である」という事態の実質は何か —— 33

第1節 本章の主題 ..... 33

(1) 精神科医が見いだす「自由の問題」 33

(2) 自由ではない状態とは——自己が自己であるという課題—— 34

第2節 人は意味と関わる ..... 36

(1) 摂食障害——感情が問題なのか・自己とは?—— 36

(2) 異常な望み?——何をどのように望むのか—— 39

(3) 現在の瞬間を越えたものとしての選択と意味 41

(4) 意味事象と意味世界の成立 43

(5) 食べることの意味と食べることにおける自由 45

第3節 感情と想像 ..... 47

(1) 感情としてのその都度の自己・意味を経由して生まれる感情 47

(2) 意味事象と想像の働き 49

(3) 想像と意味世界の秩序 50

第4節 自己像 ..... 52

(1) 自己の象かたどり ..... 52

(2) 自己像と感情 54  
 結語 精神が自由であるということ 56

### 第3章 自己像——意味世界を生きる——……………57

- (1) 名乗る 58  
 (2) 時の推移とともにある現実と意味次元 59  
 (3) 意味世界を生きる 61  
 (4) 変わりながら同じであるもの——「自己同一性」の二つの概念—— 63  
 (5) 過去の（評価による）効力と人相互の関わり 64  
 (6) 自己了解と他の人による理解 65  
 (7) 「個人情報」 67  
 (8) 自己 68

### 第4章 言葉と価値——意味世界は価値世界である——……………71

本章の主題 71

第1節 語が抱え込む評価的響き……………73

- (1) 言葉の作用——意味と評価的力—— 73  
 (2) 評価語——形容語—— 74  
 (3) 「男」と「男性」 77  
 (4) 敬語法 78  
 (5) 差別語——名詞—— 78  
 (6) 意味と価値 81

(7) 複合語や比喻における評価的響きの成立 82

第2節 特定の人<sup>が</sup>にむかつて——諸価値<sup>が</sup>が賭けられる言葉の現場—— 84

(1) 言葉の現場 84

(2) 日常生活の中で 85

(3) 心を映す言葉・心を開く言葉 87

第3節 言葉の影響下にあること 94

(1) 大切な言葉・導きの言葉 94

(2) 眩惑／幻惑する言葉——観念と感情—— 94

(3) 権威化する語・フレーズ——「共生」「多様性」という語の例—— 96

(4) 分かりやすさと価値表明——その裏側—— 97

(5) コマーシャル的な言葉との比較 99

(6) 流行り標語<sup>はや</sup> 100

結び 言葉を受け取る者として・言葉を発する者として 101

第5章 感情と言葉 103

第1節 言葉への感情の表出、言葉による感情の誘発・喚起<sup>ゆうせい</sup>・宥静<sup>ゆうせい</sup> 103

(1) 言葉の作用 103

(2) 感情を表出し(別の感情を)誘発する言葉 105

(3) 感情の喚起を狙う言葉・感情を宥め<sup>なだ</sup>静める言葉 108

第2節 感情を表現する言葉 110

(1) 感情は表出する・感情を表現する 110

(2) 感情の数?と名前——感情研究者たちの前提—— 111

第3節 言葉から感情へ …………… 122

(1) 感情の想像、理解、共感の立ち位置を調べるという課題 122

(2) 物語の中の恋・現実の恋 123

(3) 現実の恋における「想像⇄物語」という要素 125

(4) 想像による感情の二つの性格 130 127

(5) 感情の想像から現実の感情へ 130 127

(6) 言葉による応答と感情の湧出——歎びと哀しみ—— 132

(3) 心の概念と感情の概念・感情の語彙 112

(4) 心の描写——さまざまな比喩—— 114

(5) 感情の語彙の増殖と響き合いによる諸感情の位置取り(付 感情の反省と静謐化) 118

(6) 感情の描写——響き合う比喩—— 120

第6章 感情と意味世界——感情に関して「適切さ」を言うとはどういうことか、を切り口に——

第1節 問題提起 …………… 135

(1) 怖がらなくていい 135

(2) 感情一般の発生の理由が分かるということと適切さを言うことと 138

(3) 人の感情と関わる 141

(4) 問題の移りゆき 143

第2節 人の感情が分かるかという問い …………… 144

(1) 顔の表情その他を見る 144

(2) 知覚と想像 148

第3節 回り道の考察——知覚から想像へ—— …………… 151

	(1) 色の特定	151
	(2) 色の帰属	153
	(3) 確定した具体的なものとして色を見る	155
	(4) 痛さの特定と痛さの想像	156
	(5) 体の知覚と痛さの想像	159
第4節	感情の特定と人の有りよう	160
	(1) 感情の特定	160
	(2) 或るときの人との有り方のさまざまと感情	162
	(3) 感情を気にすることは人の或るとき存在の有りの質を気にすること	164
第5節	理解・分類・想像	165
	(1) 感情の多様性の特徴——感情ではない要素が入り込んでくる?——	165
	(2) 同じ・似ている・違う——分類の原理——	169
	(3) 人が見ている黄色がどのようなものであるかを理解すること、人が懐いている感情がどのようなものであるかを理解すること	171
	(4) 他の人の感情の想像・自分の感情の理解・一人称の感情経験	173
第6節	理解としての想像を導くもの	174
	(1) 表情の分類と感情の種別化	174
	(2) 色を見て味が分かること・体(体の一部)を見て分かることのさまざま	176
	(3) 表情(体の一部としての顔)を見て分かる事柄の二種	179
第7節	状況という概念	182
	(1) 表情と反復的に結びつくもの	182

(2) 状況とは意味的なものである

——恐怖の感情の生起に関して「危険」の概念を持ち出すことを手掛かりに—— 183

(3) 意味と意味の妥当性 184

第8節 己の有りようを感情として理解する ..... 187

(1) 意味の感受によって生じる諸感情 187

(2) 「恐怖反応」と恐怖感情 190

(3) 男の子の場合——体の感覚・そして自らの有りようを感情として理解することへ—— 194

(4) 意味の感受——判断・感情・体の感覚—— 195

(5) 体の反応の種別化 198

(6) 感受する意味内容の違いと感情の種別化 199

第9節 感情自身を意味世界の中に位置づける ..... 201

(1) 感情の理解と種別化・感情を表す言葉 201

(2) 感情が生まれる理由と感情が果たす役割とを述べてみることに 205

(3) 感情に適切さを言うこと 208

(4) さまざまな連鎖①——意味—感情—感情の意味事象化—感情—— 212

(5) さまざまな連鎖②——意味—感情、意味—「感情+行動?」、意味—感情—感情の意味事象化—行動、行動による感情の変容—— 213

(6) なぜ「適切さ・不適切さ」が中心となるのか 216

註 ..... 220

あとがき ..... 263



## 著者紹介

松永澄夫(まつなが すみお) 立正大学教授、東京大学名誉教授

1947年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科中退。

人が関わるあらゆる事柄の基本的筋道について、言葉による地図を作成することを目指す。そのために、自然の一員としての生命体、動物である人間における自己性の問題をはじめ、知覚世界、意味の世界、社会の諸秩序などがどのようにして成立し、互いにどのような関係にあるのか、その順序に注意を払って考察している。伝統的哲学が育んできた諸概念や言葉から自由になって、日常の言葉で一つ一つの語にあらためて適切な内容を盛り込みながら叙述してゆくことを心がけている。食に関する文章が高校の教科書『国語総合』に掲載。

### 【単著】

『経験のエレメント—体の感覚と物象の知覚・質と空間規定—』東信堂 2015年

『価値・意味・秩序—もう一つの哲学概論：哲学が考えるべきこと—』東信堂 2014年

『風の想い—奈津—』春風社 2013年

『哲学史を読むⅠ』東信堂 2008年

『哲学史を読むⅡ』東信堂 2008年

『音の経験—言葉はどのようにして可能となるのか—』東信堂 2006年

『言葉の力』東信堂 2005年

『食を料理する—哲学的考察—』東信堂 2003年

『知覚する私・理解する私』勁草書房 1993年

### 【編著】

『言葉の歎び・哀しみ』東信堂 2011年

『哲学への誘いⅠ 哲学の立ち位置』東信堂 2010年

『哲学への誘いⅡ 哲学の振る舞い』東信堂 2010年

『哲学への誘いⅢ 社会の中の哲学』東信堂 2010年

『哲学への誘いⅣ 世界経験の枠組み』東信堂 2010年

『哲学への誘いⅤ 自己』東信堂 2010年

『言葉は社会を動かすか』東信堂 2010年

『言葉の働く場所』東信堂 2008年

『哲学の歴史』全12巻、別冊1巻 中央公論新社 2007～2008年 編集委員

第6巻(19世紀英仏) 責任編集 2007年 別冊「インタビュー」 2008年 (編集委員として、第62回毎日出版文化賞特別賞受賞)

『環境—文化と政策』東信堂 2008年

『環境—設計の思想』東信堂 2007年

『環境—安全という価値は…』東信堂 2005年

『フランス哲学・思想事典』弘文堂 1999年

『私というものの成立』勁草書房 1994年

### 【共著】

『哲学 はじめの一步』春風社 2015年

『文化としての二〇世紀』東京大学出版会 1997年

『死』岩波書店 1991年

『テキストブック西洋哲学史』有斐閣 1984年

『行為の構造』勁草書房 1983年

## 感情と意味世界

2016年7月15日 初 版第1刷発行

[検印省略]

定価はカバーに表示してあります。

著者©松永澄夫／発行者 下田勝司

印刷・製本／中央精版印刷

東京都文京区向丘1-20-6 郵便振替00110-6-37828

〒113-0023 TEL (03)3818-5521 FAX (03)3818-5514

発行所  
株式会社 東信堂

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO., LTD.

1-20-6, Mukougaoaka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan

E-mail : tk203444@fsinet.or.jp http://www.toshindo-pub.com

ISBN978-4-7989-1370-4 C3010 © Matsunaga Sumio